

小型はえ縄漁船の急増 —南太平洋ビンナガ危うし

2011年12月21日 みなと新聞 掲載

P I T I A（太平洋諸島まぐろ漁業協会：太平洋11カ国のまぐろ業界団体を会員とし、2005年設立）が、12月8日、プレスリリースを世界に発信、「南太平洋で小型はえ縄漁船が急増し、ビンナガまぐろの乱獲が進んでいる。中西部太平洋漁業委員会（WCPFC）が、速やかに対策を取るように」と訴えた。

ビンナガ資源は、強靱であると評価されているが、P I T I Aは、「科学者は、最近、これ以上漁獲量を増やすと、経済的にビンナガ漁業は成り立たなくなると警告している。近年、釣獲率も落ち、魚体も小型化が進んでいることから、漁業者は、既にビンナガ資源は、厳しい状態にあると実感している。また、ビンナガを狙うといっても、メバチ、キハダも混獲するので、ビンナガ漁船が増加すれば、メバチ・キハダ資源にも影響を及ぼす。最後のツケは結局、太平洋の島嶼国が負うことになる。」と懸念を表明している。

◆FRP漁船に超低温搭載◆

実態はどうか？日本貿易統計によれば、日本が輸入した冷凍ビンナガまぐろは、2003年2,804トンに過ぎなかったが、その後、急増し、2008年7,994トン、2009年8,487トンと6年間で3倍になっており、ビンナガの漁獲が進んでいる状況の一端を示している。

このような状況をもたらしている背景を、P I T I A関係者に照会したところ、「南太平洋島嶼国を基地とする小型はえ縄漁船の増加と、超低温冷凍コンテナ輸送の発達による刺身まぐろ貿易の効率化」にあるとし、「特に、最近、FRP漁船に超低温冷凍装置を搭載した低コストの小型はえ縄漁船が出現している。また、既存の小型はえ縄漁船に超低温冷凍装置を設置改造することも多数行われている。」と述べている。小型はえ縄漁船の漁獲能力は、大型はえ縄漁船に匹敵するとの情報もあり、新たな過剰漁獲能力問題が生じつつあるようだ。

◆小型漁船増加は自然の成り行き◆

これまで、地域漁業管理機関の管理は、大型まぐろ漁船を対象とし、小型漁船は除外されてきた。小型漁船の漁獲能力が小さく、漁獲物の輸出手段が、運搬船或いは、航空機に限定されており、資源に与える影響は少ないと判断されていたためだ。しかし、南太平洋島嶼国のまぐろ漁業への参入意欲のたかまりと、厳しい規制の下で、発展途上国の権利として認められている南太平洋島嶼国の漁獲枠を利用し、実質的に操業を確保しようとする先進国の思惑を背景に、小型はえ縄漁船が増加するのは、自然の成り行きともいえよう。また、大型漁船に対する規制が厳しくなればなるほど、小型漁船へのシフトも行われるだろう。いずれにしても、彼等の漁獲物の行き先が、日本に向うのであれば、地中海クロマグロの時のように、過剰漁獲を齎し、資源の衰退を招いたのは、日本だと再び、国際社会の批判にさらされる可能性もある。実態を把握し、適切な対応を取る必要がある。（了）